

ある植物観察会での一コマ。初夏の天気の良い昼下がり、河川の堤防を10人ほどの男女が歩いていた。

生徒達「ウワァ・・・、きれい!! 真っ黄色」「一面のタンポポ」  
講師「これはタンポポに似ているけどタンポポではありません」  
生「えっ、タンポポそっくりだけど」「なんていう名前ですか」  
「タンポポとどこが違うの」

講「タンポポと同じキク科ですがエゾコウゾリナ属という属のブタナという名前で、ヨーロッパ原産の帰化植物です」

生「ブタナ? でも可愛い花だよ」「タンポポと同じ花だよ」「あそこにタンポポと同じ綿毛もあるし」

講「タンポポと違うのは、タンポポは1本の花の軸、花の軸のことを花茎というのですが、地際から出た1本の花茎の先端に一つの花を付けます。ブタナでは花茎が途中でいくつかに枝分かれして、その枝分かれした先に花を付けます。しかも花茎はタンポポよりずっと背が高いです」

生「へえ〜、ホントだ。花茎が枝分かれしてる」「タンポポより花茎が長いみたい。それにタンポポは真っ直ぐな花茎だったように思うけれどブタナの花茎はろくろ首みたいに細長くて曲がってる」

講「曲がっている理由は分かりませんが花茎を切ってみると、どちらも中空でタンポポは丸くブタナには陵があります」

生「葉っぱはどこにあるのですか」

講「ブタナもタンポポも葉はすべて根生葉で、地面にへばり付くように広がります。ほかの草の下に隠れていることもありますよ」

生「ほんとだ。葉はタンポポみたいにギザギザがある」

講「葉はすべて根生葉といったけれど、よく見ると花茎が枝分かれしているところに鱗片状の葉がついているのがわかります」

生「へえー、ホントだ」「でも、こんなに可愛い花なのにどうしてブタナなんていうかわいそうな名前がついたのですか」

講「1934年に神戸の六甲山で発見されたときヨーロッパの *Hypochaeris radicata* L. と同定されたのですが、*Hypochaeris* が『子豚の為に』というような意味で、それに、フランスでのこの草の名前が“Salade de porc”（豚のサラ

ダ）ともいわれ、それを日本語に訳して『ブタナ』と言われるようになったといわれています。特に花の姿・形を見て名前を付けたのではないようです。その1年前に北海道で見つけられた時には『タンポポモドキ』と名付けられました。英語名では“Cats ear”とか“false dandelion”とか言われるから、姿・形を見て名付けたとすると、この『タンポポモドキ』の方が合ってるかもしれません」

生「私としては『タンポポモドキ』の方がよかったかな」

講「〇〇さんはこの近所でしたね。夕方、日が暮れる頃にまたこのブタナを見に来てください。この真っ黄色のブタナの色がなくなっていますから」

生「色がなくなるってどういうことですか」

講「ブタナには『概日リズム』というのがあって、これは生物が24時間周期で繰り返す体内時計のことで、ブタナは夕方になってくると花を閉じます。あくる日の明るい昼間になるとブタナは黄色い花を開きます。そんなことも観察してみてください」

堤防を歩いてきた人たちは少し先の高水敷の公園で解散したようであった。

